

雇用不安が与える仕事満足度および 将来への希望に関する実証分析

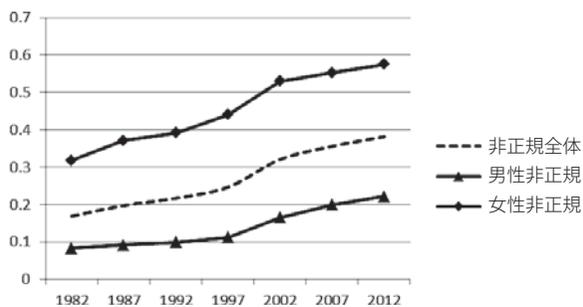
横 田 耕 祐

- I はじめに
- II 先行研究
- III 使用データ
- IV 共分散構造分析
- V 回帰分析
- VI コレスポネンス分析
- VII おわりに

I はじめに

総務省統計局「就業構造基本調査」から、男女別非正規労働者割合の推移をグラフ化したものが第1図である¹。第1図が示しているように、1982年以降、男女共に雇用者全体に占める非正規労働者の割合は増加の一途を辿っている。特に、バブル崩壊以降、景気の改善が見られず、総務省統計局「労働力調査」(第2図)によると、1990年には2.1%だった完全失業率は上昇を続け、2002年には5.4%にまで達した。2000年から2007年の間には改善傾向があったものの2012年には4.3%を示している。このような雇用環境の下で、各個人は日々の生活における財・サービスの購入に必要な賃金との引き替えのみを目的として、労働サービスの供給を行っているのだろうか。

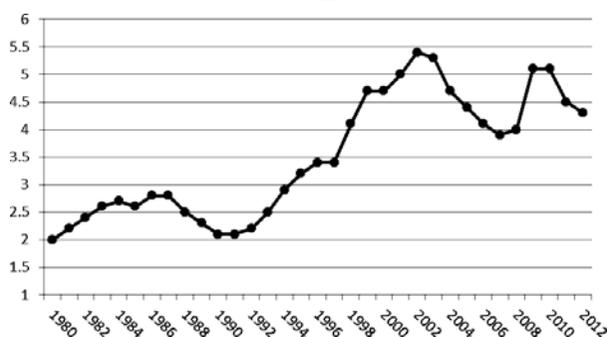
第1図 非正規労働者割合



出所：総務省統計局「就業構造基本調査」

1 非正規従業員割合 = $1 - (\text{正規の職員・従業員}) \div (\text{会社などの役員を除く雇用者})$ によって算出している。

第2図 完全失業率



出所：総務省統計局「労働力調査」

経済学理論では、個人の時間の割り当て方を労働と余暇に分けて分析を行い、個人にとって余暇は正の効用を、労働は負の効用をもたらす活動であると想定される。労働はその負の効用と引き替えに、企業から賃金を得て様々な財・サービスを消費することを可能とする。このとき、個人（雇用者）は「やりがい」「使命感」「満足」などを抱くことなく自らの労働に従事することとなる。したがって、職業選択の基準は労働がもたらす負の効用と賃金率との関係がトレード・オフである状況の下で、各人の効用関数に応じて決定される。しかし、実際に何らかの労働に携わっている場合、個人は正の効用を得ることはできないのであろうか。もしそうであるならば、職業選択の機会において業界や職種というカテゴリー分けにはほとんど意味を持たないことになる。なぜなら、全く異なる業界・職種で同程度の労働環境と賃金が与えられる複数の選択肢が与えられたとすれば、どの選択肢を採ってもよいことになるからである。実際、大学生が就職活動をする時には業界研究を行う。それは、自らが就職を希望する企業がどのような業界に属しているかによって、同じ職種であっても各業界で生産される財・サービスが異なるため、自分の興味や関心に合うものを扱いたいと考え、それが労働から得られる正の効用へと結びつくからであろう。

このような観点から、本稿では、労働が個人にもたらす正の効用を「仕事満足度」と解釈した上で、その満足度に影響を与える要因分析を共分散構造分析および回帰分析で行った。第2節では、これまでの幸福度研究を中心に本稿と関連性がある先行研究をサーベイする。第3節では、本稿の実証分析で用いる東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトの東京大学社会科学研究所パネル調査シリーズ「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y)・壮年パネル調査 (JLPS-M)」Wave 3 (2009) と Wave 4 (2010) のデータ²

2 [二次分析]に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「東大社研・壮年パネル調査 (JLPS-M) wave 1-4, 2007-2010」(東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト)の個票データの提供を受けました。

に関する抽出および加工方法を述べる。第4節では、共分散構造分析による仕事満足度と将来への希望に与える要因を分析する。さらに、この結果の頑健性を確かめるために、第5節では順序プロビット／ロジット分析を行う。第6節では、職業と失業／倒産可能性および将来への希望との関係性を視覚的に捉えるためにコレスポネンス分析を行い、最後に第7節において本稿で得られた実証分析の結果をまとめる。

II 先行研究

幸福度／満足度の問題は、哲学、倫理学、心理学、社会学などで長い間議論されてきた。経済学で主観的厚生水準である幸福度／満足度を分析対象として扱われるようになってまだ間もない。そもそも、経済学は客観性を保持しながら個人や社会を分析することを目的としている。それ故に、人間や社会を対象としながらも自然科学的アプローチを適用し、数理モデルに基づいた理論／実証分析を中核に据えて発展してきた。そのため、客観的に観察可能な変数が分析の中心となり、主観的厚生水準はあまり活用されてこなかった。幸福度／満足度は個々人によって基準が異なるため、個人間での比較が難しいと考えられてきたことが、その原因の一つだと考えられる。例えば、1万円の臨時収入として受け取った時に得られる効用を個人間で比較できないと言うことである。1万円を得るとして、Aは5だけ効用が増加し、Bは10だけ効用が増加したと回答したとしよう。このとき、BはAの2倍の効用を得たと結論づけられるだろうか。ここで、AとBが効用に関して同じ尺度を持って回答できているかという問題が浮上する。一般に、効用に関する尺度は個々人で異なるため、このように効用を基数的に比較することができないからだ。経済学はこの問題を、観察可能な個人の行動を序数的効用で表現することによって解決した。この様に、経済学が客観性を重要視しながら発展してきたことを考えると、主観的厚生水準の分析に消極的だったことは自然な流れだったかもしれない。

しかし、1990年代から経済学においても幸福度／満足度に関する研究がなされるようになってきた。その理由を富岡(2006)、パソコンや統計解析ソフトの発展と、収集されるマイクロデータが増えた上に公開性が高まったことを指摘している。大竹(2004)は、計量経済学的な分析が進められる中で、個人属性や経済変数が幸福度に与える影響が安定的かつ地域的共通性も有していることがわかってきたことを指摘する。このような背景から、日本でも2000年代以降主観的厚生水準に関する研究が進められてきた。

Frey and Stutzer (2002), Diener and Seligman (2004), 白石・白石 (2007), 浦川 (2011) では、幸福度と所得／労働／健康／結婚・家族／教育／政治体制などとの関係を、経済学的アプローチのみならず、従来から行われていた社会学や心理学からのアプ

ローチによる幸福度研究を包括的かつ非常に詳細なサーベイがなされている。

客観変数と違い、主観的厚生水準を実証分析に用いる際の意義や注意点などについても認識をしておく必要があるだろう。戸田（2013）は、2004年厚生労働省『労働経済白書』から生活満足度、2007年内閣府『国民生活白書』から仕事満足度について解釈をしている。そして、質的データを用いた実証研究においてパネルデータ活用の重要性が述べられている。パネルデータによる分析は、個人の特性による固定効果を制御したモデルを推定することを可能とする点を強調している。富岡（2006）では、幸福度や満足度といった主観的厚生水準を基底的に用いる際には、それに適した分析が必要であることを様々な研究事例を用いながらまとめられている。また、客観的に観察不可能な主観形成の生成と、観察可能な変数との間の相関を動的に検証できるようにするため、今後大規模なパネルデータの必要性を強調している。一方で、Hamermesh（2004）では、主観的データによる分析に対しては消極的な見解を示している。

特に、幸福度／満足度と労働の関係については、経済学以外の分野でも非常に多くの研究がなされている。そこで、本稿での内容と関連性の強い先行研究を挙げるにとどめる。佐野・大竹（2007）では、日本とアメリカで幸福度の決定要因の差異を分析している。日本では、失業経験が負に、結婚・学歴・他人を気にする・宗教心が正に性別に関係なく安定的に有意な結果となっている。高橋（2010）では、労働政策研究・研修機構「(2003年)企業の人事戦略と労働者の就業意識に関する調査」を利用して、個人属性、収入、仕事特性を説明変数に職業生活全体満足度との関係を回帰分析で求めている。そして、職業生活全体満足度には仕事内容や賃金よりも、人間関係や福利厚生が強い影響を与えることが結論づけられている。松本（2012）では、JGSS-2010を用いて個人属性、経済的地位、労働環境を説明変数として職場環境（連帯感／ゆとり感）への影響を分析している。さらに、職場環境（連帯感／ゆとり感）を媒介変数に加え、仕事満足度を階層的重回帰分析を行っている。そこでは、職場の連帯感と心のゆとり感が仕事満足度に対して正值で有意な結果が得られている。また、独立行政法人労働政策研究・研修機構（2004）では仕事満足度、失業イメージ、不公平感などについての分析がなされている。特に、本稿との関わりでは、仕事満足度は年功賃金システム、地位競争不安、地位喪失不安が安定的に有意な結果となっている。つまり、著しく経済成長が鈍化した状況下では、安定した雇用環境を望む傾向にあると言える。Warr（1999）と Diener and Seligman（2004）は就労者の仕事内容と満足度に関するサーベイとなっている。

Ⅲ 使用データ

本稿では、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターに

よる使用許可を受け、東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトが調査を行っている、東京大学社会科学研究所パネル調査シリーズ「東大社研・若年パネル調査 (JLPS-Y)・壮年パネル調査 (JLPS-M)」Wave 3 (2009) と Wave 4 (2010) を用いて分析を行った。JLPS-Y は 20 歳から 34 歳のいわゆる「若年層」を、JLPS-M は 35 歳から 40 歳の「壮年層」を対象としており、同一調査年のアンケート項目は全く同じ内容になっている。そこで、今回はサンプル数を確保することを目的に、若年層と壮年層を区別せずに分析を行った。

今回の共分散構造分析および回帰分析で使用したアンケートの回答項目は、「1; とてもあてはまる, 2; ややあてはまる, 3; あまりあてはまらない, 4; まったくあてはまらない」の 4 件法, または「1; 満足している, 2; どちらかといえば満足している, 3; どちらともいえない, 4; どちらかといえば不満である, 5; 不満である」の 5 件法がある。これらについては、共分散構造分析や回帰分析を行った際に係数の意味を解釈しやすいように、質問内容と正の相関が強いほど大きい値となるように、4 件法の場合では「4; とてもあてはまる, 3; ややあてはまる, 2; あまりあてはまらない, 1; まったくあてはまらない」と修正を加えたデータを用いている。5 件法の場合についても同様の処理を施している。ただし、質問項目「楽しい気分であったこと」については、共分散構造分析を行う際に、「かなり神経質であったこと」と「健康上の理由で、家事や仕事などが制限されたこと」で「健康度」を表す因子を作る関係上、先述した処理は施していない。

また、共分散構造分析で用いたアンケート項目は以下に挙げた 14 項目である³。

- 「従事時間 - 1 日あたり (*, BQ03_41, CQ03_41)」
- 「教育訓練を受ける機会がある (4, BQ04_2D, CQ04_3D)」
- 「職業能力を高める機会がある (4, BQ04_2E, CQ04_3E)」
- 「今後 1 年間に失業, 倒産する可能性がある (4, BQ04_2G, CQ04_3G)」
- 「仕事の内容が面白い (4, BQ04_2H, CQ04_3H)」
- 「かなり神経質であったこと (5, BQ16A, CQ14A)」
- 「楽しい気分であったこと (5, BQ16E, CQ14E)」
- 「健康上の理由で、家事や仕事などが制限されたこと (5, BQ16F, CQ14F)」
- 「現在の満足度 - 仕事 (4, BQ23A, CQ20A)」
- 「現在の満足度 - 生活全般 (4, BQ23F, CQ20F)」

3 括弧内の数字の第 1 要素は回答項目の選択肢の個数, 第 2 要素は Wave 3 におけるラベル, 第 3 要素は Wave 4 におけるラベルを表している。ただし、「従事時間 - 1 日あたり」の第 1 要素については、数字を記入するようになっていないため選択肢が設けられていないので*としている。

- ・「自分のやりたい仕事ははっきりしている（4, BQ27A, CQ23A）」
- ・「自分の職業能力を向上させたいと思う（4, BQ27B, CQ23B）」
- ・「将来の自分の仕事や生活に希望があるか（5, BQ30, CQ25）」
- ・「収入－本人（12, BQ36A, CQ37A）」

ここで、分析に使用する回答者 ID の選択方法について述べる。先に示した 14 項目の質問について、まず、少なくとも 1 つの質問項目で「無回答」もしくは「わからない」を回答している ID の結果は分析対象から除いている。また、「従事時間－1 日あたり」についてはヒストグラムを描いてデータを整理した結果、16 時間以上を回答した結果は異常値であると認められたため、そのような回答をした ID のデータは分析から除外した。さらに、本稿での分析は仕事満足度に焦点を当てていることから、0 時間を回答した ID のデータについても除外している。したがって、1 日の労働時間を示す「従事時間－1 日あたり」については、1 時間から 15 時間までを回答していることをデータ使用の条件にしている。そして、データの選択にあたって、公務員に関しては賃金プロファイルの形状、労働時間など、一般企業とは労働・雇用環境が異なるという点を鑑み、使用データを選択する際に従業員規模についても条件を課しており、「1；1 人，2；2～4 人，3；5～9 人，4；10～29 人，5；30～99 人，6；100～299 人，7；300～999 人，8；1000 人以上，9；官公庁，10；わからない，88；非該当，99；無回答」のうち 1 から 8 を選択した ID の結果を、さらに「職業」については、1；専門職・技術職，2；管理職，3；事務職，4；販売職，5；サービス職，6；生産現場職・技能職，7；運輸・保安職のいずれかを選択した ID の結果を用いた。

以上のようなデータ処理・選択基準に基づいて、性別や雇用形態別に分類をし共分散構造分析を行った。分析対象となったデータの構成については相関表（第 1 表，第 2 表）に整理した通りである。また、記述統計は第 3 表にまとめられている。

ここで、「収入」「満足度－仕事」「今後 1 年間の倒産または失業の可能性」について、

帰無仮説：分布は各カテゴリで同じである。

として、特に正規雇用者と非正規雇用者間に有意な差が認められるかを検定する。いざ

第 1 表 2009 年

	正規雇用	非正規雇用	計
男性	912	98	1010
女性	612	220	832
計	1524	318	1842

第 2 表 2010 年

	正規雇用	非正規雇用	計
男性	806	73	879
女性	576	223	799
計	1382	296	1678

第3表 記述統計

	2009									
	全体		男性正規		女性正規		男性非正規		女性非正規	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
現職・職業-大分類	3.36	1.90	3.64	2.08	2.86	1.53	3.98	2.18	3.36	1.57
現職・従事時間-1日あたり	8.77	1.99	9.53	1.80	8.23	1.83	8.79	2.09	7.09	1.56
現職・企業規模	5.88	1.78	5.98	1.79	5.53	1.76	6.23	1.77	6.27	1.66
雇用契約期間	1.17	0.38	1.00	0.00	1.00	0.00	2.00	0.00	2.00	0.00
教育訓練を受ける機会がある	2.44	1.00	2.51	0.95	2.36	1.04	2.42	1.03	2.44	1.04
職業能力を高める機会がある	2.63	0.91	2.71	0.85	2.57	0.96	2.56	0.99	2.46	0.94
今後1年間に失業、倒産をする可能性がある	1.71	0.81	1.71	0.79	1.58	0.75	1.97	0.92	1.90	0.91
仕事の内容が面白い	2.63	0.82	2.63	0.80	2.61	0.81	2.67	0.95	2.67	0.87
かなり神経質であったこと	3.53	1.05	3.60	1.06	3.46	0.99	3.46	1.22	3.49	1.04
楽しい気分であったこと	3.23	0.80	3.15	0.78	3.33	0.79	3.37	0.91	3.21	0.85
健康上の理由で、家事や仕事などが制限された	4.51	0.83	4.62	0.76	4.41	0.89	4.41	0.94	4.40	0.84
現在の満足度-仕事	3.27	1.10	3.20	1.11	3.36	1.04	3.21	1.21	3.34	1.15
現在の満足度-生活全般	3.71	0.93	3.69	0.94	3.78	0.87	3.57	0.99	3.64	0.96
自分のやりたい仕事ははっきりしている	3.25	0.69	2.76	0.74	2.76	0.74	2.96	0.87	2.74	0.82
自分の職業能力を向上させたいと思う	2.61	0.76	3.27	0.67	3.21	0.70	3.29	0.84	3.20	0.71
将来の自分の仕事や生活に希望があるか	3.33	0.86	3.33	0.85	3.42	0.80	3.30	1.03	3.14	0.94
収入-本人	6.37	1.72	7.29	1.42	5.76	1.54	5.70	1.34	4.54	1.00
	2010									
	全体		男性正規		女性正規		男性非正規		女性非正規	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
現職・職業-大分類	3.23	1.86	3.54	2.05	2.79	1.53	3.30	2.18	3.24	1.55
現職・従事時間-1日あたり	8.78	2.04	9.62	1.78	8.23	1.84	8.78	2.26	7.17	1.92
現職・企業規模	5.90	1.78	6.03	1.80	5.56	1.75	6.16	1.86	6.22	1.64
雇用契約期間	1.18	0.38	1.00	0.00	1.00	0.00	2.00	0.00	2.00	0.00
教育訓練を受ける機会がある	2.36	0.96	2.43	0.93	2.30	0.98	2.45	1.04	2.23	1.01
職業能力を高める機会がある	2.54	0.89	2.65	0.84	2.46	0.91	2.75	0.92	2.27	0.95
今後1年間に失業、倒産をする可能性がある	1.67	0.83	1.65	0.78	1.57	0.78	2.07	1.05	1.88	0.97
仕事の内容が面白い	2.64	0.85	2.66	0.82	2.57	0.87	2.78	0.93	2.69	0.87
かなり神経質であったこと	3.44	1.01	3.51	1.04	3.37	0.96	3.52	0.99	3.37	0.99
楽しい気分であったこと	3.25	0.79	3.19	0.77	3.32	0.78	3.15	0.98	3.30	0.79
健康上の理由で、家事や仕事などが制限された	4.42	0.81	4.52	0.80	4.30	0.81	4.53	0.75	4.32	0.80
現在の満足度-仕事	3.37	1.06	3.36	1.07	3.40	1.05	3.26	1.13	3.39	1.06
現在の満足度-生活全般	3.66	0.91	3.65	0.90	3.71	0.88	3.38	1.01	3.66	0.97
自分のやりたい仕事ははっきりしている	2.83	0.79	2.83	0.76	2.78	0.79	3.04	0.90	2.88	0.82
自分の職業能力を向上させたいと思う	3.27	0.69	3.31	0.65	3.21	0.72	3.44	0.73	3.23	0.73
将来の自分の仕事や生活に希望があるか	3.30	0.87	3.28	0.87	3.33	0.82	3.38	1.08	3.24	0.91
収入-本人	6.34	1.74	7.29	1.44	5.71	1.52	5.85	1.80	4.69	1.11

れの項目についても順序データであるため、独立サンプルによる Kruskal-Wallis の検定を行った。「収入」については、正規雇用者と非正規雇用者との大きな乖離は所得格差と呼ばれ、深刻な社会問題として捉えられている。検定の結果、2009年、2010年ともに有意水準1%で帰無仮説は棄却された。このことから、分析対象とするアンケートデータは経済全体の状況を反映しているものと思われる。また、「満足度-仕事」については、2009年のp値が0.469、2010年のp値が0.644であったことから帰無仮説は採択された。したがって、雇用形態によって労働から得られる満足度には差が生じないということが言える。

最後に、「今後1年間の倒産または失業の可能性」に関しても、検定の結果2009年、

2010年ともに有意水準1%で帰無仮説は棄却された。景気や業績の悪化に伴う雇用調整／人員整理が行われる際には非正規雇用者がその対象として優先される。それ故に、非正規雇用者は雇用の調整弁の役割を担わされている。正規雇用者を解雇する際には通常の退職金に加えて、早期退職のための上乗せの費用が生じるが、非正規雇用者を解雇する際には契約更新時であればそのような費用は発生しない。つまり、雇用者数を調整する際に要する調整費用が、正規雇用者と比べて非正規雇用者の方が格段に低いことが考えられる。また、雇用調整には雇用者数によるものと、労働時間によるものがある。例えば、横田（2012）では、動学モデルを用いて雇用者数に掛かる調整費用と、労働時間による調整費用との相対的な大きさを産業レベルで計測している。ここでは、鉱業と建設業のような非正規雇用者の割合が多いと考えられる産業では、実際に労働時間に比べ雇用量による調整費用の方が小さいという結果が得られている。

IV 共分散構造分析

4.1 モデル設定

共分散構造分析は、パス図を描くことで各変数間の関係を視覚的に容易に捉えられる点特徴的である。また、回帰モデルに比べモデルを作成する際の自由度が高いため、より複雑なモデルで分析することが可能となる。四角形はデータにより観測された変数である観測変数を表し、楕円はデータからは直接観測されない変数や因子である潜在変数を表している。 ϵ_i (i : 正の整数) はモデルには反映されない誤差変数を表す。そして、それぞれの変数を結ぶ矢印が因果関係を表しており、矢印の始点が原因を、終点が結果であることを示す。これらの要素でパス図が描かれ、各変数の関係性が統計的に分析される。

本稿における分析課題は、経済学理論では負の効用をもたらすと仮定される労働から正の効用を得ているかを、アンケートデータを用いて実証的に明らかにすることを目的としている。ただし、本稿における「労働から得られる正の効用」とはアンケート項目「現在の満足度－仕事」によって示されたものであると定義する。そして、もう一つの分析課題は、この仕事満足度に影響を与える要因が性別や雇用形態の差異によって違いが生じるのかを示す。

仕事満足度に影響を与える主な要因として、「健康度」「労働意識」「職業能力を高める機会があること」「収入」および「今後1年間の倒産または失業の可能性」の4つに焦点を当て共分散構造分析を行った。「健康度」に関しては、「かなり神経質であったこと」「楽しい気分であったこと」および「健康上の理由で、家事や仕事などが制限されたこと」の3項目をまとめ「健康度」因子として表している。

また、「労働意識」についても、「仕事の内容が面白い」「自分の職業能力を向上させたいと思う」および「自分のやりたい仕事ははっきりしている」、これら3項目をまとめて「労働意識」因子としている。従事している職務に対して積極的に取り組むことができているならば、無事に仕事を終わらせられた達成感や充実感といった満足度を労働から得られると思われる。また、積極的に職務に向き合うことで、そこから新たな興味や関心を見つけ出し満足度が高まるだろう。このような仮定に基づき、「労働意識」は仕事満足度に対して正の相関があることが期待される。

経済学において、個人（消費者）は自らが保有する労働サービスを労働市場に供給し、その対価として賃金を受け取ることができると思う。そして、その賃金が消費を決定する際の予算となり、予算制約の下で自分の効用を最大にするように財・サービスの組み合わせを決定し、それを消費する。この様な枠組みで考えると、労働から得られる賃金は予算集合を決定するため、それは同時に効用水準に影響を及ぼすこととなる。予算集合が大きくなるほどより多くの財・サービスの消費が可能となるため、「収入」の増加が仕事満足度の増加につながると考えられる。また、「現職・従事時間-1日あたり」と「収入」の間にも正の相関が見られると予想される。

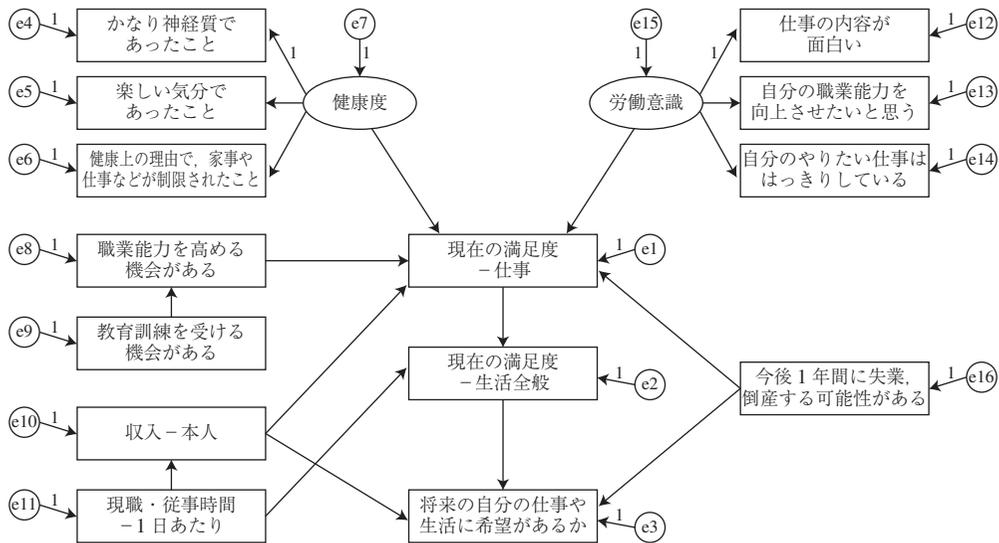
既に第1図および第2図で示した通り、近年の労働市場は労働供給の立場から見ると非常に厳しい状況であることがわかる。これは、倒産や人員整理などが原因で失職した際、新たな職を見つけるための求職コストや、雇用のミスマッチのリスクが高まることを意味する。仮に、何らかの原因で失職の可能性を認識したとすれば、他企業での雇用を有利にするために、在職中に自分の職業能力を高める努力をするだろう。自ら自己啓発や教育訓練のための費用を負担せずに職業能力を現在の職務遂行と同時に向上させることが可能であれば、仕事満足度は高くなると想像される。また、現在の日本の経済状況を考えると、近い将来の倒産および失業のリスクの増大は、労働のみならず生活全般の満足度や将来への希望に対して負の影響を及ぼすこととなるだろう。

以上のような想定の下、パス図（第3図）を用いて共分散構造分析を行った。

4.2 分析結果

第3図にしたがって共分散構造分析を行って得られた推定結果のうち標準化推定値とp値をまとめたものが第4表である。「労働意識」因子として用いた「仕事の内容が面白い」「自分の職業能力を向上させたいと思う」および「自分のやりたい仕事ははっきりしている」については、全てのカテゴリーで1%有意であった。さらに、「労働意識」が「満足度-仕事」に与えるパスについても、全てのカテゴリーで係数値は正值となり1%有意に得られた。このことから、自らが従事している職務に対して、積極的に興味／関心／楽しさを抱きながら携わることにより、労働から正の効用を引き出すことがで

第3図 パス図



きると考えられる。

また、「健康度」が「満足度-仕事」に与える影響については、男性非正規雇用者を除き正值で有意という結果が得られた。つまり、労働から正の効用を得るためには心身の健康もまた必要な要件といえる。ただし、2010年の非正規雇用者、そして2009年、2010年とも男性の非正規雇用者に関しては有意な結果は得られていない。特に、男性の非正規雇用者については、他のカテゴリーと比べて極端にサンプル数が少ないため、本稿の結果から直ちに非正規雇用者は健康状態と仕事満足度の間に相関がないと結論するには早すぎるであろう。

先述したように、経済学の観点から、収入の増加は消費の増加をもたらすため効用水準を引き上げる要因であると考えられる。しかし、男性の正規雇用者を除き「収入」が「満足度-仕事」に及ぼす要因としては有意ではないという結果を得た。全てのカテゴリーにおいて、「現職・従事時間-1日あたり」の増加は「収入」に対して正值で1%有意である。また、「現職・従事時間-1日あたり」は「満足度-生活全般」とは有意ではない。つまり、労働時間が増えると収入も増加するが、収入の増加は仕事満足度には寄与しない。さらに、成熟した経済である日本において、労働時間が増えることによる余暇時間の減少は生活全般の満足度を下げると予想されるが、そのように結論づける結果は得られていない。

一方で、「収入」は「将来の自分の仕事や生活に希望がある」に対して、特に非正規雇用者および男性の非正規雇用者には安定的に正值で有意となっている。このことから、現在の労働から得られる所得は現在の労働や生活に対して満足を与えるものではなく、将来の生活への希望を与えるものとなっていると解釈することができる。長期に渡

第4表 結果：共分散構造分析

	正規		非正規		男性正規		男性非正規		女性正規		女性非正規	
	2009	2010	2009	2010	2009	2010	2009	2010	2009	2010	2009	2010
収入—本人	0.330*** (0.000)	0.343*** (0.000)	0.362*** (0.000)	0.379*** (0.000)	0.114*** (0.000)	0.099*** (0.000)	0.286*** (0.000)	0.313*** (0.000)	0.387*** (0.000)	0.399*** (0.000)	0.304*** (0.000)	0.349*** (0.000)
職業能力を高める機会がある	0.502*** (0.000)	0.514*** (0.000)	0.444*** (0.000)	0.507*** (0.000)	0.475*** (0.000)	0.481*** (0.000)	0.472*** (0.000)	0.386*** (0.000)	0.531*** (0.000)	0.544*** (0.000)	0.432*** (0.000)	0.528*** (0.000)
現在の満足度—仕事	0.450*** (0.000)	0.494*** (0.000)	0.503** (0.019)	0.300 (0.110)	0.490*** (0.000)	0.470*** (0.000)	0.233 (0.328)	-0.873 (0.111)	0.512*** (0.000)	0.480*** (0.000)	0.867** (0.017)	0.563*** (0.006)
現在の満足度—仕事	2.012*** (0.000)	2.087*** (0.000)	1.493*** (0.000)	1.898*** (0.000)	2.161*** (0.000)	2.384*** (0.000)	1.365*** (0.000)	2.044*** (0.000)	0.951*** (0.000)	1.712*** (0.000)	1.477*** (0.000)	1.647*** (0.000)
現在の満足度—仕事	0.025 (0.311)	0.054** (0.040)	0.146** (0.012)	0.095* (0.072)	0.007 (0.823)	0.052 (0.139)	0.100 (0.357)	0.282*** (0.006)	0.141** (0.000)	0.071* (0.073)	0.181*** (0.008)	0.083 (0.173)
現在の満足度—仕事	-0.287*** (0.000)	-0.186*** (0.000)	-0.037 (0.542)	-0.149*** (0.004)	-0.317*** (0.000)	-0.173*** (0.000)	0.123 (0.268)	-0.088 (0.330)	-0.171*** (0.000)	-0.177*** (0.000)	-0.106 (0.132)	-0.180*** (0.003)
現在の満足度—生活	0.017 (0.222)	0.007 (0.628)	-0.054 (0.227)	-0.034 (0.352)	0.088*** (0.000)	0.052*** (0.010)	-0.037 (0.632)	0.031 (0.553)	-0.025 (0.308)	-0.002 (0.942)	-0.040 (0.533)	-0.022 (0.667)
現在の満足度—生活	0.409*** (0.000)	0.414*** (0.000)	0.371*** (0.000)	0.450*** (0.000)	0.399*** (0.000)	0.428*** (0.000)	0.279*** (0.000)	0.474*** (0.000)	0.422*** (0.000)	0.396*** (0.000)	0.415*** (0.000)	0.436*** (0.000)
現在の満足度—生活	0.003 (0.790)	0.012 (0.286)	0.018 (0.472)	-0.027 (0.250)	0.022 (0.144)	0.023 (0.137)	0.061 (0.177)	0.009 (0.844)	-0.019 (0.249)	0.013 (0.459)	-0.004 (0.913)	-0.024 (0.418)
楽しい気分であった	0.534*** (0.000)	0.596*** (0.000)	0.491** (0.014)	0.876 (0.142)	0.474*** (0.000)	0.447*** (0.000)	0.316 (0.152)	1.724 (0.160)	0.685*** (0.000)	0.806*** (0.000)	0.682** (0.016)	1.064** (0.011)
かなり神経質であった	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
健康上の理由で家事や仕事などが制限	0.411*** (0.000)	0.378*** (0.000)	0.637** (0.012)	0.154 (0.297)	0.327*** (0.000)	0.280*** (0.000)	1.726 (0.381)	-0.542 (0.191)	0.509*** (0.000)	0.490*** (0.000)	0.418** (0.050)	0.352** (0.035)
自分のやりたい仕事ははっきりしている	1.330*** (0.000)	1.517*** (0.000)	1.082*** (0.000)	1.408*** (0.000)	1.310*** (0.000)	1.494*** (0.000)	1.018*** (0.000)	1.859*** (0.000)	1.325*** (0.000)	1.543*** (0.000)	1.081*** (0.000)	1.219*** (0.000)
自分の職業能力を向上させたいと思う	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
仕事の内容が面白い	2.137*** (0.000)	2.273*** (0.000)	1.573*** (0.000)	2.208*** (0.000)	2.331*** (0.000)	2.392*** (0.000)	1.278*** (0.000)	2.385*** (0.000)	1.164*** (0.000)	2.071*** (0.000)	1.772*** (0.000)	2.022* (0.000)
将来の自分の仕事や生活に希望がある	0.028** (0.018)	0.006 (0.629)	0.098** (0.017)	0.112*** (0.001)	0.054*** (0.003)	0.026 (0.173)	0.139* (0.064)	0.131** (0.023)	0.035* (0.079)	-0.009 (0.633)	0.035 (0.535)	0.052 (0.289)
将来の自分の仕事や生活に希望がある	0.286*** (0.000)	0.398*** (0.000)	0.259*** (0.000)	0.395*** (0.000)	0.273*** (0.000)	0.378*** (0.000)	0.014 (0.888)	0.470*** (0.000)	0.289*** (0.000)	0.421*** (0.000)	0.386*** (0.000)	0.375*** (0.000)
将来の自分の仕事や生活に希望がある	-0.134*** (0.000)	-0.111*** (0.000)	-0.181*** (0.001)	-0.112*** (0.024)	-0.127*** (0.000)	-0.098*** (0.006)	-0.235** (0.030)	-0.120 (0.231)	-0.126*** (0.002)	-0.126*** (0.001)	-0.15** (0.016)	-0.109** (0.054)

注1：推定値は標準化推定値である。
 注2：*は10%，**は5%，***は1%の有意水準を満たしていることを示している。

って改善の兆しが見えない経済／雇用環境から企業は柔軟な雇用調整を求めため、非正規雇用から正規雇用への移行や契約継続が困難な状況が続いている。したがって、非正規雇用者にとって、現在の生活を送ることも重要となるが、少なくとも現在の生活水準を維持したまま将来の生活を送ることができるのかということも、現在の関心事として非常に大きな問題として立ちのぼることとなる。このような観点から見ると、現在の「収入」は貯蓄という形で将来の消費水準を確保することを可能にするので、特に非正規雇用者にとっては将来への希望に強く結びつくものと考えられる。

V 回帰分析

前節では、共分散構造分析を用いて「満足度－仕事」および「将来の生活や仕事への希望」に影響を与える要因の分析を行った。そこで得られた結果の頑健性を得るために、本節では「将来の生活や仕事への希望」を被説明変数とした回帰分析を試みる。被説明変数とするデータは順序尺度であるため順序プロビット分析および順序ロジット分析を適用する。

5.1 順序反応モデル

一般に、実証分析で用いられるデータは数量データとカテゴリデータの2種類に大別することができる。さらに、数量データは間隔尺度と比例尺度に、質的データは名義尺度と順序尺度に分けることができる。本節では、順序尺度である「将来の生活や仕事への希望」を被説明変数として扱うため、通常の線型回帰モデルではなく順序反応モデルを適用する。

被説明変数 y_i がとる値を決める仮想的因子 y_i^* を潜在変数と呼び、

$$y_i^* = \mathbf{x}_i' \boldsymbol{\beta} + \varepsilon_i \quad (1)$$

で表すことができるものと仮定する。すなわち、 y_i^* は直接には観測不可能な連続的な変数であり、説明変数 \mathbf{x}_i によって体系的／線型に決定される部分と、それ以外の誤差 ε_i との和になっている。このとき、閾値を用いた次のようなルールによって y_i^* から y_i を求める。

$$y_i = \begin{cases} 0 & \text{if } y_i^* \leq \alpha_1 \\ 1 & \text{if } \alpha_1 < y_i^* \leq \alpha_2 \\ 2 & \text{if } \alpha_2 < y_i^* \leq \alpha_3 \\ \vdots & \\ M & \text{if } \alpha_M < y_i^* \end{cases} \quad (2)$$

関数 F で ε の累積分布関数を表すものとするれば、実際に観測されるデータである y の発生確率は以下のようなになる。

$$\begin{aligned} \Pr(y_i = 0 \mid x_i, \beta, \alpha) &= F(\alpha_1 - x_i' \beta) \\ \Pr(y_i = 1 \mid x_i, \beta, \alpha) &= F(\alpha_2 - x_i' \beta) - F(\alpha_1 - x_i' \beta) \\ \Pr(y_i = 2 \mid x_i, \beta, \alpha) &= F(\alpha_3 - x_i' \beta) - F(\alpha_2 - x_i' \beta) \\ &\vdots \\ \Pr(y_i = M \mid x_i, \beta, \alpha) &= 1 - F(\alpha_M - x_i' \beta) \end{aligned} \quad (3)$$

$\alpha_j (j=1, 2, \dots, M)$ も β と同様にデータから推定されるパラメータである。誤差項 ε_i の分布について、正規分布を仮定した場合「順序プロビット・モデル」、ロジスティック分布を仮定した場合「順序ロジット・モデル」と呼ぶ。

5.2 回帰分析

質問項目「将来の生活や仕事への希望」を被説明変数として、2009年と2010年のアンケートデータを用いて、それぞれにおいて順序プロビット分析および順序ロジット分析を行った結果が第5表である。また、適合状況が6にまとめられている。

順序プロビット／ロジット分析を行った際、閾値 (Limit Point) の推定値は、

$$\text{LIMIT}_2 < \text{LIMIT}_3 < \text{LIMIT}_4 < \text{LIMIT}_5 \quad (4)$$

を満たしている必要がある。ここで、本節で行った順序プロビット／ロジット分析において、第5表の中段に示されている推定結果を見てみると、推定された値は全てにおいて1%有意となっているため、いずれの分析も正しく行われていることが確認される。すなわち、ランクが適切に識別されたことがわかる。また、第5表の下段より、

帰無仮説：全ての係数はゼロである。

第5表 結果：回帰分析

	Probit 2009	Probit 2010	Logistic 2009	Logistic 2010
満足度－仕事	0.071** (0.022)	-0.007 (0.843)	0.106* (0.060)	0.003 (0.965)
満足度－生活全般	0.205*** (0.000)	0.391*** (0.000)	0.394*** (0.000)	0.711*** (0.000)
男性ダミー	-0.084 (0.161)	-0.025 (0.701)	-0.157 (0.141)	-0.036 (0.747)
収入	0.031 (0.108)	0.014 (0.473)	0.048 (0.161)	0.010 (0.790)
失業／倒産可能性	-0.142*** (0.000)	-0.108*** (0.002)	-0.258*** (0.000)	-0.204*** (0.001)
仕事が面白い	0.045 (0.264)	0.091** (0.031)	0.108 (0.141)	0.140* (0.063)
正規雇用ダミー	-0.192** (0.012)	0.003 (0.974)	-0.336** (0.014)	-0.064 (0.651)
企業規模	0.031** (0.048)	-0.001 (0.959)	0.065** (0.018)	0.014 (0.645)
職業能力向上の機会	0.075** (0.017)	0.043 (0.215)	0.154** (0.006)	0.123** (0.045)
楽しい気分だった	0.214*** (0.000)	0.253*** (0.000)	0.343*** (0.000)	0.475*** (0.000)
やりたい仕事のはっきりしている	0.284*** (0.000)	0.338*** (0.000)	0.523*** (0.000)	0.630*** (0.000)
職業能力を向上させたい	0.212*** (0.000)	0.211*** (0.000)	0.342*** (0.000)	0.358*** (0.000)
神経質だった	0.010 (0.698)	0.062** (0.030)	0.022 (0.639)	0.096* (0.060)
健康上の理由で活動が制限された	-0.038 (0.228)	-0.033 (0.338)	-0.076 (0.170)	-0.063 (0.300)
LIMIT_2	0.981*** (0.000)	1.488*** (0.000)	1.599*** (0.001)	2.610*** (0.000)
LIMIT_3	2.153*** (0.000)	2.997*** (0.000)	3.889*** (0.000)	5.543*** (0.000)
LIMIT_4	3.598*** (0.000)	4.429*** (0.000)	6.364*** (0.000)	8.041*** (0.000)
LIMIT_5	5.145*** (0.000)	6.119*** (0.000)	9.117*** (0.000)	11.098*** (0.000)
Pseudo R-squared	0.114	0.153	0.114	0.158
Log likelihood	-2051.262	-1785.470	-2050.873	-1775.151
LR statistic	528.564	643.465	529.341	664.104
Prob (LR statistic)	0.000	0.000	0.000	0.000

注1：*は10%，**は5%，***は1%の有意水準を満たしていることを示している。

注2：被説明変数：「将来の生活や仕事への希望」

という帰無仮説（LR statistic）は、各分析において p 値（Prob (LR statistic)）が 0.000 であることから強く棄却されている。

また、第6表は分析の適合状況を示したものである。モデル全体で実際の値と同じ結果を得る割合は、2009年データ使用の分析では順序プロビット、順序ロジットの双方において50%、2010年データ使用の分析では順序プロビットは53.7%、順序ロジットでは54.3%であった。特に、正しく認識されていなかった箇所は「将来の生活や仕事

第6表 適合状況

2009 Orderd-Probit						2009 Orderd-Logistic					
Dep. Value	Obs.	Correct	Incorrect	%Correct	%Incorrect	Dep. Value	Obs.	Correct	Incorrect	%Correct	%Incorrect
1	40	1	39	2.5	97.5	1	40	1	39	2.5	97.5
2	230	18	212	7.826	92.174	2	230	24	206	10.435	89.565
3	770	517	253	67.143	32.857	3	770	502	268	65.195	34.805
4	678	389	289	57.375	42.625	4	678	392	286	57.817	42.183
5	124	1	123	0.806	99.194	5	124	1	123	0.806	99.194
Total	1842	926	916	50.271	49.729	Total	1842	920	922	49.946	50.054

2010 Orderd-Probit						2010 Orderd-Logistic					
Dep. Value	Obs.	Correct	Incorrect	%Correct	%Incorrect	Dep. Value	Obs.	Correct	Incorrect	%Correct	%Incorrect
1	28	1	27	3.571	96.429	1	28	1	27	3.571	96.429
2	258	48	210	18.605	81.395	2	258	63	195	24.419	75.581
3	673	453	220	67.311	32.689	3	673	441	232	65.527	34.473
4	620	399	221	64.355	35.645	4	620	404	216	65.161	34.839
5	98	0	98	0	100	5	98	1	97	1.02	98.98
Total	1677	901	776	53.727	46.273	Total	1677	910	767	54.264	45.736

への希望」という項目に対して、1, 2 および 5 を回答した部分であり、これらの回答数は全体に対して小さい割合であるところが共通している。一方で、3 および 4 と回答した部分についてだけ見ると、比較的高い割合で正しく認識されている。

第5表から、「将来の生活や仕事への希望」に対して、「満足度-生活全般」「失業/倒産可能性」「仕事が楽しい」「やりたい仕事ははっきりしている」「職業能力を向上させたい」はいずれの分析においても1%有意であったことが示されている。「失業/倒産可能性」は、符号が負であることから、前節の共分散構造分析における結果(第4表)と整合的である。つまり、近い将来に倒産もしくは失業する可能性が低いほど将来に対して希望を抱きながら生活を送ることができることを意味している。一方で、「収入」は回帰分析では有意な結果を得ることができなかった。なお、共分散構造分析においても、特に女性においては、収入が将来への希望に結びつかないという結果であった。

政府は景気後退期には法人税率の軽減、公共事業の拡充、子ども手当など様々な方法で個人所得を増大させるための政策を行う。しかし、本稿で得られた結果から、所得の増加は必ずしも直接将来への希望に寄与しないといえる。法人税率の軽減や公共事業の拡充は、倒産や失業のリスクの下げることにより、あくまでも将来への希望を生む間接的な効果であると言える。過去に行われた1999年小渕内閣の時に実施された地域振興券、2010年民主党政権下で施行され子ども手当や自民政権における児童手当は直接的に所得を増加させる効果となるため、これらの施策が将来に向けた仕事や

生活の希望に正の影響をもたらすとは必ずしも有効ではないということになる。国民の幸福度や将来への希望を向上させることが国家の役割の一つであるとすれば、巨額の財政赤字を抱える日本の財政状況下では、短期的に有権者が喜ぶものではなく将来に希望を抱くことができるような政策を慎重に吟味し、実行する必要があるだろう。労働の対価である「収入」ではなく、「仕事が楽しい」「やりたい仕事ははっきりしている」「職業能力を向上させたい」といった自分の仕事に対して前向きな意識こそが将来への希望につながっているという結果は、今後の新しい政策の在り方を示唆するものと思われる。さらに、企業においても、雇用者に対して労働のインセンティブを高め生産効率を上げるためには、賃金体系だけではなく会社組織の在り方や、自己啓発／教育訓練の機会の提供などが有効だと考えられる。

VI コレスポネンス分析

本稿で利用したアンケートは、「職業」については1；専門職・技術職，2；管理職，3；事務職，4；販売職，5；サービス職，6；生産現場職・技能職，7；運輸・保安職の7種類に分類されている。これらの職業，性別，雇用形態に分けて共分散構造分析や順序プロビット／ロジット分析を行うことも可能であるがサンプル数が減少してしまう。そこで、「職業」と「将来の生活や仕事への希望」および「失業／倒産可能性」との関連性を見つけるためにコレスポネンス分析を行った。

コレスポネンス分析を行う前に、「職業」と「将来の生活や仕事への希望」および「失業／倒産可能性」との間に関連性があるのかを調べるために χ^2 検定を行った。その結果をまとめたものが第7表である。有意水準10%以下のカテゴリーは両変数との間に関連性があると判断することができる。

第8表は、「職業」と「失業／倒産可能性」との調整済み残差を示すクロス表，第4図から第11図はコレスポネンス分析によって作成された性別および雇用形態別の

第7表 結果： χ^2 検定

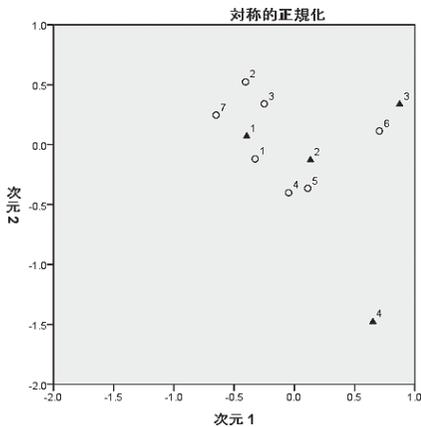
		職業＝失業／倒産可能性	職業＝将来への希望
2009	男性正規	0.001***	0.001***
	男性非正規	0.611	0.044**
	女性正規	0.000***	0.002***
	女性非正規	0.423	0.775
2010	男性正規	0.269	0.091*
	男性非正規	0.029**	0.002***
	女性正規	0.002***	0.111
	女性非正規	0.056*	0.298

注：*は10%，**は5%，***は1%の有意水準を満たしていることを示している。

第8表 職業と失業／倒産可能性のクロス表 (調整済み残差)

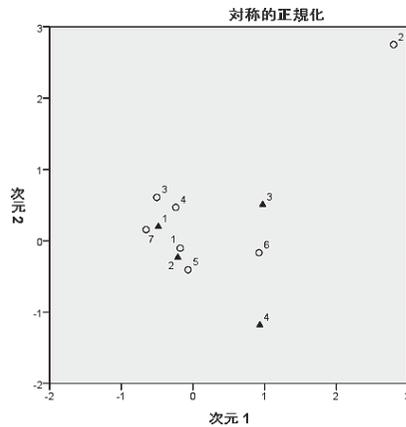
		1	2	3	4	1	2	3	4
2009		男性正規				男性非正規			
職業	1	2.29	-0.65	-2.40	0.04	0.51	0.04	-0.71	0.06
	2	1.41	-0.75	-0.50	-1.13	-0.77	-0.77	2.05	-0.28
	3	1.43	-0.74	-0.50	-1.22	1.37	-0.48	-0.39	-1.07
	4	-0.05	0.32	-0.86	1.16	0.16	0.16	0.04	-0.64
	5	-0.75	0.79	-0.24	0.53	-0.36	0.66	-0.67	0.48
	6	-4.56	1.06	4.73	0.80	-1.74	-0.70	1.98	1.53
	7	1.59	-0.22	-1.52	-1.07	0.64	0.64	-0.92	-0.98
		女性正規				女性非正規			
職業	1	3.90	-2.15	-2.28	-1.76	0.88	-1.76	1.22	-0.09
	2	-0.79	0.06	-0.59	3.93	-0.82	-0.77	2.30	-0.27
	3	-1.18	0.84	0.88	-0.53	-0.29	1.50	-1.43	-0.25
	4	0.57	-0.65	-0.69	1.66	0.07	-0.67	0.55	0.34
	5	-3.02	1.52	2.72	-0.26	0.07	1.20	-0.93	-1.09
	6	-1.44	0.84	0.29	1.70	-1.09	-0.33	0.45	2.10
	7	-1.60	2.08	-0.48	-0.20	0.41	-0.51	0.50	-0.55
2010		男性正規				男性非正規			
職業	1	0.73	-0.32	-0.22	-0.84	1.30	-2.00	1.29	-1.06
	2	0.26	0.82	-1.50	-0.40				
	3	1.94	-0.85	-0.96	-1.56	0.54	0.51	-0.47	-0.90
	4	-0.11	-0.92	0.59	1.85	0.99	-1.59	-0.67	1.57
	5	-0.04	-0.62	0.80	0.41	0.52	1.98	-1.57	-1.40
	6	-2.56	1.26	1.54	1.21	-2.60	0.56	0.56	2.52
	7	0.16	0.97	-1.15	-1.14	-1.44	1.72	0.36	-0.62
		女性正規				女性非正規			
職業	1	2.76	-1.73	-1.85	-0.19	-0.21	-1.19	-0.49	3.14
	2	-1.75	1.50	-0.72	2.35				
	3	0.99	-0.73	0.23	-1.33	-0.88	-0.04	1.50	-0.48
	4	-2.90	2.47	0.72	0.58	2.53	-1.57	-0.26	-1.69
	5	-0.95	0.18	0.22	1.97	-0.68	2.42	-1.16	-1.16
	6	-2.65	1.56	2.59	-0.97	-0.19	-0.01	0.30	-0.07
	7	1.20	-0.92	-0.46	-0.24	-0.42	1.46	-0.83	-0.50

第4図 2009 男性正規雇用



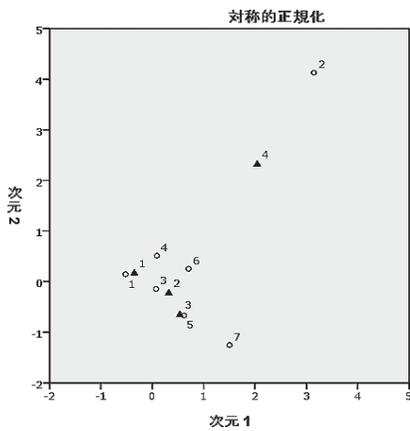
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第5図 2009 男性非正規雇用



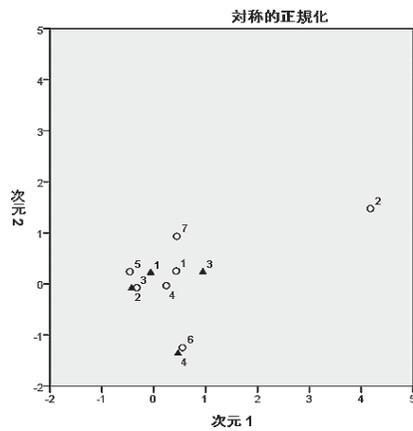
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第6図 2009 女性正規雇用



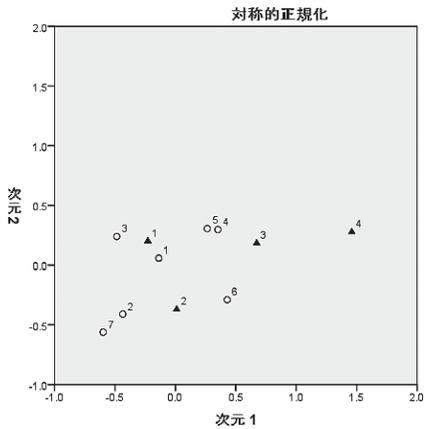
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第7図 2009 女性非正規雇用



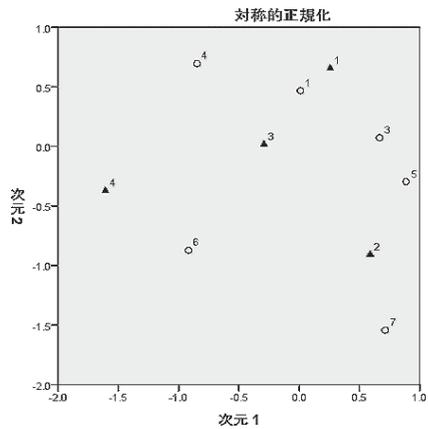
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第8図 2010 男性正規雇用



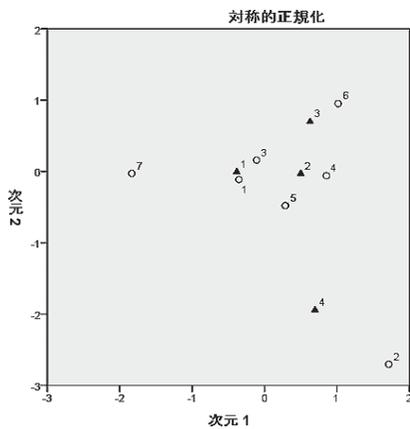
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第9図 2010 男性非正規雇用



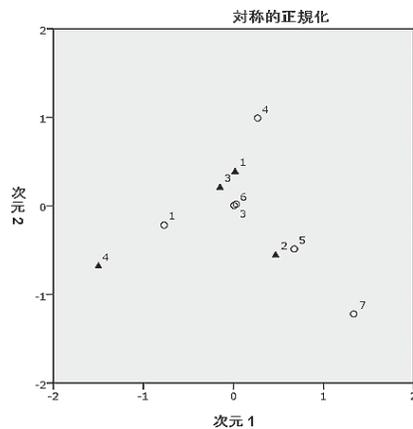
○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第10図 2010 女性正規雇用



○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第11図 2010 女性非正規雇用

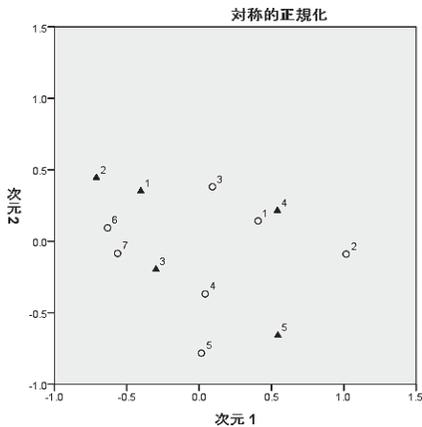


○現職・職業-大分類
▲今後1年間に失業、倒産をする可能性がある

第9表 職業と将来への希望のクロス表 (調整済み残差)

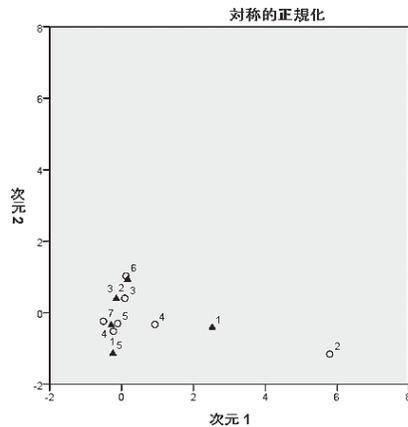
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
2009		男性正規					男性非正規				
職業	1	0.49	-1.98	-2.39	3.44	0.48	-0.62	-1.05	-0.78	0.78	1.68
	2	-1.04	-1.82	-1.93	2.84	1.32	3.94	-0.39	-0.75	-0.73	-0.34
	3	-0.34	0.87	-1.34	1.11	-0.37	0.25	-0.64	1.47	-0.32	-1.31
	4	-0.46	-1.22	1.05	-0.39	0.47	1.33	0.46	-0.75	-0.71	0.74
	5	-0.19	-0.53	0.51	-1.13	1.88	-0.29	0.16	-1.28	0.89	0.70
	6	0.74	3.71	2.23	-4.33	-1.40	-0.23	2.47	0.97	-1.55	-1.69
	7	0.10	-0.23	2.31	-1.24	-1.93	-0.90	-1.38	0.72	0.80	-0.13
2010		男性正規					男性非正規				
職業	1	0.40	-2.99	-2.15	3.09	1.78	-0.99	-2.24	-0.28	1.99	1.29
	2	-0.16	-0.62	-0.21	0.85	-0.45	-0.23	-0.47	1.20	-0.68	-0.23
	3	-1.87	2.55	-0.18	-0.37	-1.54	0.00	1.03	0.08	-0.93	0.00
	4	-0.77	-0.93	1.33	-1.12	1.11	0.12	1.15	-0.42	-0.23	0.70
	5	0.68	0.28	0.94	-0.96	-0.56	0.12	-0.26	-0.05	0.54	-0.70
	6	3.38	1.77	1.33	-2.66	-0.81	1.53	0.94	-0.07	-1.56	0.31
	7	-0.13	-0.50	1.76	-1.22	-0.36	-0.46	-0.94	1.40	-0.28	-0.46
2010		男性正規					男性非正規				
職業	1	-0.15	-0.82	-2.24	3.24	-0.52	-1.52	-1.56	-3.62	3.68	2.20
	2	-0.99	-1.26	-0.24	1.05	0.86					
	3	0.49	0.05	-0.99	0.44	0.93	-0.53	1.04	0.26	-0.95	0.11
	4	-0.97	-0.55	-0.09	0.98	-0.80	3.43	-0.26	-0.01	-1.17	-0.06
	5	1.13	1.54	-0.48	-1.29	0.77	-0.82	-0.25	2.88	-0.94	-1.68
	6	0.33	1.07	2.72	-3.26	-0.79	0.72	1.35	0.85	-1.58	-0.82
	7	0.31	0.14	1.98	-2.48	0.58	-0.37	0.72	1.48	-1.28	-0.75
2010		女性正規					女性非正規				
職業	1	-1.75	-2.89	0.30	2.07	0.27	0.12	-1.32	-2.30	2.18	2.34
	2	-0.23	0.28	1.04	-0.99	-0.48					
	3	-1.22	2.20	-1.03	-0.30	-0.12	0.38	1.15	1.28	-2.37	-0.17
	4	3.66	-0.24	-0.42	-0.13	-0.09	-0.80	-0.77	0.94	0.48	-1.02
	5	0.52	0.34	0.82	-1.00	-0.38	0.52	0.74	-1.03	1.07	-1.23
	6	1.23	1.13	0.52	-1.84	0.59	-0.52	-0.41	1.73	-1.30	-0.13
	7	-0.15	-0.61	0.37	0.24	-0.30	-0.24	0.67	-0.31	0.14	-0.52

第12図 2009 男性正規雇用



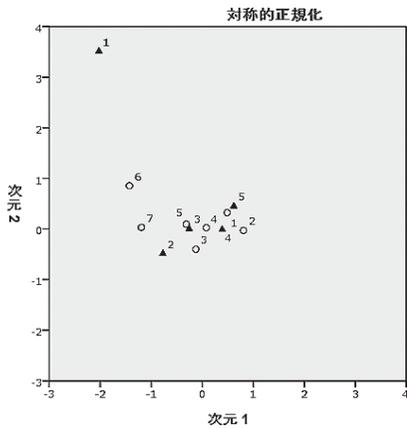
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第13図 2009 男性非正規雇用



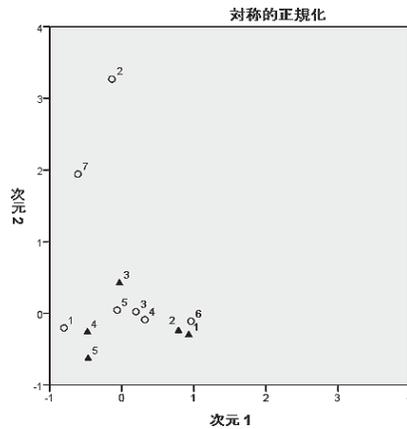
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第14図 2009 女性正規雇用



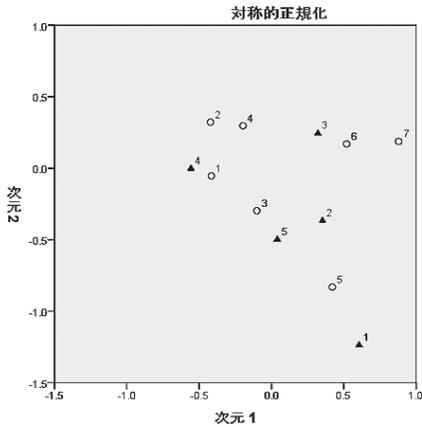
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第15図 2009 女性非正規雇用



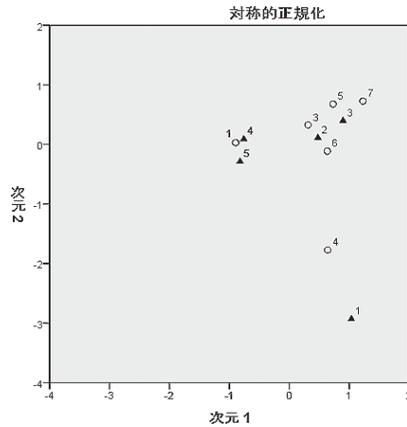
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第16図 2010 男性正規雇用



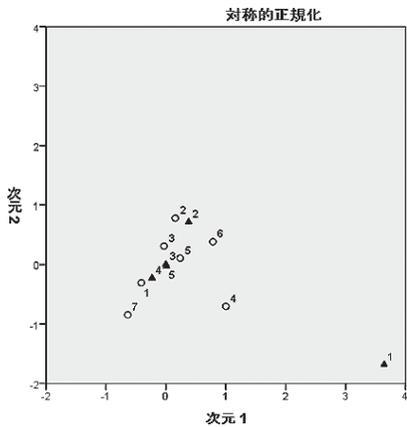
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第17図 2010 男性非正規雇用



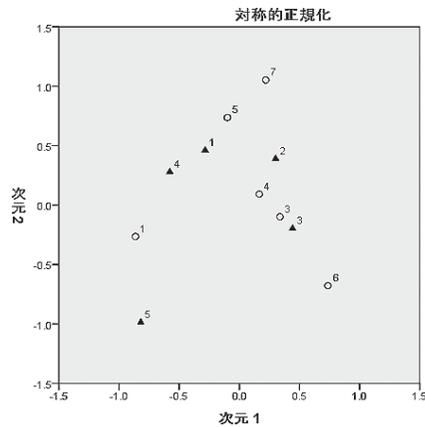
○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第18図 2010 女性正規雇用



○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

第19図 2010 女性非正規雇用



○現職・職業-大分類
▲将来の自分の仕事や生活に希望があるか

「職業」と「失業可能性」との同時布置図である。同様に、第9表は、「職業」と「将来への希望」との調整済み残差を示すクロス表、第12図から第19図はコレスポネンス分析によって作成された「職業」と「将来への希望」との同時布置図である。

第8表を見ることによりどの組み合わせに特徴があるかを見つけやすくなる。調整済み残差の値は、正值で大きいほどその組み合わせには強い正の相関があり、負値で大きくなるほど強い負の相関があることを示す。例えば、2009年男性正規雇用者において、6；生産現場職・技能職では「失業／倒産可能性」のレベル3の調整済み残差は4.73であるのに対し、レベル1は-4.56である。したがって、「失業／倒産可能性」をレベル3と選ぶ傾向が非常に強く、レベル1を選ばない傾向が非常に強いことがわかる。つまり、生産現場職・技能職に就いている男性正規雇用者は、倒産もしくは失業の可能性を強く認識していると言える。そして、このことを同時布置図（第4図）で確認してみると、6；生産現場職・技能職と「失業／倒産可能性」のレベル3とは非常に近い位置に配置されている。この傾向は2010年の同時布置図でも確認することができる。さらに、2009年、2010年の男性非正規雇用者、 χ^2 検定で有意ではなかったが2009年の女性非正規雇用者についても同様の結果である。このことは、デフレ経済および産業の空洞化による国内生産量の減少といった日本が直面している経済環境を反映していると解釈できる。一方で、2009年、2010年ともに1；専門職・技術職に就いている男性正規雇用者は、同時布置図（第4図）では「失業／倒産可能性」のレベル1と近く、調整済み残差を見ても比較的大きい正值を示している。このことは、女性の正規雇用者についても確認される。したがって、専門的な技術を身に付けて、その技術を生かすことができる職業に就いている人は失職リスクをあまり認識していないと言えよう。このことから、人員整理を行う際、企業は独自の技術が他社に流出することを避けるために、専門職従事者を優先的に保護しているのではないかと推測できる。

「失業／倒産可能性」に関する先の分析結果は、「将来への希望」に関する結果ともある程度整合的である。男性の正規雇用者において、失職の可能性を強く認識していると考えられた6；生産現場職・技能職従事者は、「将来への希望」では2009年（第12図）はレベル2、2010年（第16図）はレベル2または3の付近に位置している。その一方で、「失業／倒産可能性」をあまり強く認識していないと推測された1；専門職・技術職は、2009年、2010年ともにレベル4の近くにある。このことは、男性の非正規雇用者についても類似の傾向が見られる。

以上のことから、専門的知識や技術を体得し、それを主として用いるような業務に就いているホワイトカラーの失職リスクの認識は弱く、他方、いわゆるブルーカラーと呼ばれる生産現場職に就いている人は失職リスクを強く認識している。これは、企業が効率的な経営をするためには、雇用者数による雇用調整に掛かる費用を抑え、柔軟に増減

をさせる必要がある。そのために、代替性の高いブルーカラーはアルバイト／パート／派遣従業員という非正規雇用となりやすい。短い労働契約期間を前提としているため、契約が更新されるか否かは不確実なので失職リスクを背負い、将来への希望は他の職種に比べ相対的に小さくなる。しかし、ホワイトカラーは正規雇用であるため安定した環境を持っており、将来をある程度予測することができる。

また、第4節での共分散構造分析、第5節での順序プロビット／ロジット分析でも得られた結果のとおり、コレスポネンス分析においても、失職リスクと将来に対する希望は負の相関関係にあると言えることがわかった。したがって、この両者の関係性の信頼度は高いと思われる。将来への希望を高めるために所得上昇の効果も考慮する必要があるが、失職リスクの軽減も同時に行う必要がある。

VII おわりに

本稿では、雇用不安が仕事満足度と将来への希望に与える影響を分析するために、東京大学社会科学研究所パネル調査シリーズ「東大社研・若年パネル調査（JLPS-Y）・壮年パネル調査（JLPS-M）」Wave 3（2009）と Wave 4（2010）を用いて共分散構造分析、順序プロビット／ロジット分析、コレスポネンス分析を行った。外生変数が変化しないと仮定すれば、賃金の上昇は可処分所得の増加、すなわち予算集合の拡大をもたらすことにより効用は上昇すると考えられる。しかし、本稿で行ったこれらの分析では、男性正規雇用者のみ収入の変化は仕事満足度に有意に影響を与えるが、それ以外のカテゴリーでは当てはまらないことがわかった。特にこのような傾向が見られると期待される男性非正規雇用者は収入は現在の仕事満足度ではなく、将来生活への希望と正の相関が見られた。この結果は、男性非正規雇用者においては、現在の生活よりもむしろ将来への不確実性に対する不安の方が優先されるのではないかと推測される。以上のことから、政府が行う景気対策は、企業業績を上げ雇用状況を改善させることにより、労働における将来への不安感を取り除くという側面が強調される。したがって、直接所得を増加させる政策よりも、雇用のミスマッチを改善させる政策を優先させた方が良いことになる。このことは、失業者への金銭的な政策よりも、就業させる方が幸福度を上げるためには有効な政策となるという大竹（2004）での主張や、失業率が高い環境では就労者にも失業の不安が広がり社会全体の幸福度が下がるという Frey and Stutzer（2002）に類似した結果と言えるだろう。

バブル崩壊以降、日本企業の経営方法の特徴として、企業が利益の極大化という経営の効率性を優先させる傾向が広まったことが挙げられる。大幅な人員整理を行い、経済状況に合わせて柔軟な雇用調整を可能にするために非正規雇用を増やしている。ほとん

どのカテゴリーで失業の可能性が高まることは仕事満足度の低下、将来の生活への期待感の低下をもたらすという結果が得られたのはこのような状況を反映したと言えるだろう。一方で、自分の仕事に明確なビジョンを有し、前向きに取り組んでいる人ほど仕事満足度は高くなる。そして、仕事満足度と生活全般の満足度、生活全般の満足度と将来に対する希望はそれぞれ正の相関にあることもわかった。何らかの政策によって直接的に働く人のビジョンや就業態度に影響を与えることは難しいが、企業が資格取得や自己啓発に対する金銭的補助、正規雇用の推進などが自発的に進められるような政策を行うことにより、雇用者の労働意欲を向上させ仕事および生活全般の満足度を高めることが可能となる。

参考文献

- Diener, E. and Seligman, M. E. P. (2004) "Beyond Money: Toward an Economy of Well-Being," *Psychological Science in the Public Interest*, Vol.5, No.1, pp.1-31.
- Frey, B. S. and Stutzer, A. (2002) "What Can Economists Learn from Happiness Research," *Journal of Economic Literature*, Vol.40, No.2, pp.402-435.
- Hamermesh, D. S. (2004) "Subjective Outcomes in Economics," *NBER Working Paper*.
- Warr, P. (1999) "Well-Being and the workplace," in Kahneman, D., Diener, E., and Schwarz, N. eds. *Well-Being: The Foundations of Hedonic Psychology*: New York: Russel Sage Foundation.
- 浦川邦夫 (2011) 「幸福度研究の現状-将来不安への処方箋」, 『日本労働研究雑誌』, 第 53 巻, 第 7 号, pp.4-15.
- 大竹文雄 (2004) 「失業と幸福度」, 『日本労働研究雑誌』, 第 46 巻, 第 7 号, pp.59-68.
- 佐野晋平・大竹文雄 (2007) 「労働と幸福度」, 『日本労働研究雑誌』, 第 49 巻, 第 1 号, pp.4-18.
- 白石賢・白石小百合 (2007) 「幸福度研究の現状と課題-少子化との関連において」, 『経済分析』, 第 179 号, pp.96-131.
- 高橋桂子 (2010) 「就業形態別にみた雇用労働者の仕事満足度-二次データによる分析」, 『新潟大学教育学部研究紀要人文・社会科学編』, 第 3 巻, 第 1 号, pp.71-82.
- 戸田淳仁 (2013) 「満足度 (質的データ)」, 『日本労働研究雑誌』, 第 55 巻, 第 4 号, pp.58-61.
- 富岡淳 (2006) 「労働経済学における主観的データの活用」, 『日本労働研究雑誌』, 第 48 巻, 第 6 号, pp.17-31.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構 (2004) 「勤労意識のゆくえ-勤労生活に関する調査 (1999, 2000, 2001 年)-」.
- 松本みゆき (2012) 「労働者の職場の連帯感, ゆとり感が孤独感及び職務満足感に及ぼす影響-JGSS-2010 を用いた分析-」, 『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』, 第 12 号, pp.29-39.
- 横田耕祐 (2012) 「動学モデルを用いた日本の産業レベルの雇用調整費用に関する実証分析」, 『社会科学』, 第 42 巻, 第 2-3 号, pp.53-68.